

Keyword: 「若者の自殺」「いじめの原因」「ストレス」「学校」「家庭」

1. 研究の背景

この探究を行おうと思ったのは、どんな人がいじめの加害者または被害者になるのかが知りたいからである。日本の問題の1つに「若者の自殺」があり、自殺理由として、学校でのいじめが4割ほどを占めている。いじめの構造を知り、いじめの加害者の心理を知ることによって、事前にいじめが起きるのを防げるかもしれないし、いじめが起きたら被害者や加害者への対応の仕方を変えられるかもしれない。

私が小学生の頃にクラスでいじめがあったが、私はいじめられているクラスメイトを助けずに見ぬふりをした。もし助けたら私がターゲットになるかもしれないと思ったし、そもそもいじめられていた子はその子がいじめられる前に私がその子から嫌がらせを受けていたので、自業自得だと思っていたからだ。今考えると、どれだけその子が嫌いでも先生に報告するなど、直接関わらなくとも助ける手段があったとは思っている。

私のようにいじめを傍観したことがある人は少なくないだろう。なぜ傍観する人が出てくるのだろうか。この探究ではいじめの加害者や被害者だけでなく、いじめの傍観者や対抗者(味方)の心理も探究したいと思う。一方、私は被害者に直接被害を加える加害者の心理がいじめが起きる原因にとっても大きく関わっていると思う。なぜなら、私が見てきたいじめの加害者のほとんどが、被害者のことを気に入らないからという理由でいじめを行っていたからだ。以上のことから、私はこの探究を行おうと考える。

2. 独自研究

いじめは、子供や若者の間で広く見られる問題だ。さまざまな統計データによれば、多くの学校や地域でいじめが頻繁に発生している。しかし、いじめがなぜ起こるのかに関しては、一つの単純な回答は存在しない。いじめの原因は個別に異なることがある。匿名で50人に「いじめの原因について考えられること」を自由記述でアンケートを取ったので、その結果を基に考察していこう。

一つ目は、「自分の方が優位に立っていたかった」「いじめることによって優越感に浸りたかった」などの社会的な影響である。子供や若者は、自分が所属する社会的グループ内での地位を確立しようとする。いじめは、自分自身を上位の地位に位置づけるための手段として使用されることがある。いじめっ子は、他の子供を攻撃したり嘲笑したりすることで、自分の存在感や力を示そうとすると考えられる。このような行動は、いじめっ子が自己評価を高めるための方法としての役割を果たす場合がある。

二つ目は、「家庭のストレスをいじめによって発散していた」「お金が無くて人付き合いが悪い子がいたのでいじめていた」などの家庭環境の問題である。いじめに関連する要因として、虐待や家庭内の不安定さが存在することがある。いじめっ子が家庭内で搾取や暴力にさらされている場合、彼らは自分自身を守るために攻撃的な行動をとることがある。また、家庭内での不適切なモデリングやコミュニケーションの欠如も、いじめの一因となる可能性がある。

三つ目は、「相手に言われたことに腹が立った」「相手の体の特徴をいじり、エスカレートした」などの個人的な要因だ。いじめっ子は、しばしば自己コントロールの欠如や社会的なスキルの不足を抱えていることがある。彼らは自分の感情を適切にコントロールできず、衝動的な行動をとることがある。また、自己効力感や自己価値感の低さもいじめの原因となる可能性がある。いじめっ子は、攻撃や侮辱を通じて自分を強く感じようとするのだ。これらの要因がいじめの背後に存在する可能性はあるものの、いじめには多様な要素が絡み合っていることがある。また、個人的な事情や環境要因だけでなく、「先生に相談したが何も対応してくれなかった」など学校や社会全体

の問題もいじめを促進する場合がある。たとえば、校内での監視の欠如、教師や保護者の無関心、差別や偏見の存在などが、いじめを助長する要因となることがある。

3. 結論と今後の課題

以上がアンケート結果に基づいた考察である。この探究を通して被害者の外見や差別、群れや集団心理、家庭環境、学校の運営など様々な要素が関与していることが分かった。おそらくすぐにはいじめがなくなることはないが、アンケート結果をもとにいじめの対策方法を考えると、個人的な要因だけでなく、社会的な問題にも注目する必要がある、学校や地域社会ではいじめの早期発見と対処を行うことが重要だ。子供たちが相互に尊重し合い、共感し合う文化を育むためには、家庭や学校、地域社会全体での関与が必要である。